

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
 神奈川 碩心会 発行

63年1月現在 会員数
 返子地区 172名
 葉山地区 279名
 大船地区 60名
 (合計 511名)

63年1月号 (186号)
 発行者 根岸岳萃
 編集者 中村愛岳

新年のごあいさつ

会長 根岸 岳萃

明けましてお目出度うございます。吟友の皆さんが、ご家族共々良い新年を迎えられましたこと心からお慶び申し上げます。碩心会も皆さんのご協力により、発展しつつ、新しい年を迎えることが出来ましたことは誠に同慶に堪えません。

特に昨年は碩心会創立五十周年の吟道大会が、皆さんの絶大なるご協力で、すばらしい大会を開催することが出来ました。そして今年は五十一周年と、百年の大目標に向かって第一歩をふみ出す年でもあります。昨年末の円高不況も漸次安定傾向にありますが、高令化社会に於ては、日々を楽しく、明るく暮すことが第一です。

先人ののこされた立派な詩と、多数の吟友に接し、力強く声を張りあげる吟道は、ストレス解消と、健康の増進に、大いに効果のあるものです。今年も皆さんが益々ご精進されますようお願い致します。年頭のごあいさつと致します。

あけまして おめでとうござります

(指導者一同より)

松井岳洋	根岸岳萃	加藤岳相
三井岳隴	沼田洸岳	井沢潮岳
小峯桜岳	加藤圭岳	中村幸岳
竹石憲岳	千葉剣岳	千葉香岳
中村愛岳	鈴木萃岳	森田暁岳
岩崎恵岳	鈴木孝岳	守谷崇岳
松野宝岳	杉山雪岳	秋元梁岳
佐藤湧岳	石渡桂岳	矢嶋悦岳
黒崎李岳	広瀬翔岳	村田静岳
沼田義岳	清水耀岳	伊藤峰岳
白井寿岳	白井麗岳	上村象風
金指萌風	渡辺誠風	一柳道風
佐久間爽風	木村松風	田上洲風
寺脇歌風	立沢御風	小形雄風
行谷佳風	宇都宮徳風	千葉美風
松井正風		(名簿順)



63年度おもな行事予定

(総本部関係)

- 1・17(日)正師上席研修講座…岳風会ホール
 - 1・31(日)準師範研修講座…労音会館
 - 2・7(日)師範研修講座…
 - 1・31(日)指導者研修講座…岳風会ホール
 - 2・14(日)指導者研修講座…岳風会ホール
 - 2・21(日)
 - 3・20(日)第93回全国大会…国技館
 - 7・10(日)選拔者大会…九段会館
 - 7/29(土)・7/30(日)夏期大学
 - 10・2(日)第94回全国大会…福島
- (神奈川県本部関係)
- 1・31(日)初理事会初吟会…横一・ぼんち
 - 2・11(祭)高段者審査会(七段)…平塚農業会館
 - 2・21(日)“(八段・京浜七段)”
 - 2・28(日)“(皆伝以上)”
 - 5・5(祭)選拔者予選会…三島
 - 5・8(日)定期総会…横須賀第一
 - 5・29(日)青少年吟道大会…
 - 6・19(日)横二地区吟道大会…鎌倉中央分館
 - 6・26(日)横一地区吟道大会…
 - 8・7(日)指導者講習会…
 - 9・11(日)湘南地区吟道大会…
 - 9・18(日)京浜地区吟道大会…
 - 10/1(土)・10/4(火)全国大会参加吟行会

- 10・16(日)県本部吟道大会…京浜
- 11・20(日)高段者研修会(七・八段)
- 11・23(祭)“(皆伝以上)”
- 11・26(土)納吟会…湘南

◎高段位審査実施のお知らせ

- ◇七段2/11(祭)・八段2/21(日)皆伝以上2/28(日)
- ◇受付・9時開始9:30分終了17時(各段共)
- ◇審査料二千元当日納入(各段共)
- ◇昼食は各自持参
- ◇合格された方は許証料をなるべく早く許証部(中村)又は(広瀬)へ納入して下さい。

県本部主催

◎全国大会参加吟行会のお知らせ

- 日時 63年10月1日(土)〜4日(火)
- 会費 二泊三日…六万一千円
- 三泊四日…七万七千円
- 申込 63年2月15日(加藤伍相先生まで)
- 主コース(一列車 二バス)
- 第一日 上野―会津若松―鶴ヶ城―飯森山
- 第二日 猪苗代湖―盤梯熱海温泉泊
- 第三日 盤梯吾妻スカイライン―五色沼―榎原湖畔―米沢―上杉神社―蔵王泊
- 第四日 蔵王お釜―斎藤茂吉館―りんご狩
- 上ノ山―横浜―大船―藤沢―平塚

◎指導者研修講座日割表

- 1・31(日) 井沢潮岳 広瀬翔岳 伊藤峰岳
 - 2・14(日) 根岸岳萃 加藤岳相 千葉劍岳
 - 2・28(日) 千葉香岳 竹石憲岳 鈴木孝岳
 - 沼田洗岳 小峯桜岳 加藤圭岳
 - 中村幸岳 中村愛岳 秋元梁岳
- 於 岳風会ホール・9時30分より

風林火山と武田信玄

今年のNHK大河ドラマに、武田信玄が取り上げられることが報じられています。信玄ときいて、まず思い出すのは「疾きこと風の如く 静かなること林の如し 侵略すること火の如く 動かざること山の如し」の詩吟です。この「風林火山」の旗をなびかせて進む信玄軍は、戦国最強の軍団として、周辺から恐れられていた。信玄の戦術・戦略・政略は、この旗のとおりで、一生に戦うこと百三十余度に及んだが、負け知らずという。

「鞭声肅々…」の詩で名高い、川中島の合戦に代表される、上杉謙信との争いにして、究極的には信玄のほうが優位にたっている。

だからといってただ戦争好きな武勇一辺倒な武骨な武将のみではなかつたといわれている。

宴席でよく歌われる「武田節」のなかに「人は石垣人は城 情は味方仇は敵」という有名な文句がありますが、これは中国の「衆心を以て城と成す」ということばからきた、信玄の教訓歌だそうです。民こそは山河の險にまさる城であるとの信条を、簡単な城を廻らしただけの館に住み、一生涯堅固な城を築かなかつたのを誇りとしていた。

父に代わって甲斐の国主となるや、兵を強くするには、民衆の生活が安定しなければならぬとの信念のもとに、民政に力を注ぐ富国強兵策をとり、「水を治む者は天下を治む」のことわざどおり、まず治水に力を注いだ。山梨県竜王町にある堤防は信玄堤といわれ、現在なお立派に水防の役を果たしているという。又彼は山国甲斐の資源を根本的に研究し、金山の掘削、山岳資源の開発等、今でいう総合開発を試みた。そのようにして民衆の信頼を得ることに努め、まさしく人は石垣、人は城となした。戦国時代随一の名將と評価されるのもむべなるかなと思えます。

春夜考 (その1)

松和 加藤 杉風

十一月十五日、久しぶりに戸塚にての船地区吟道温習会に参加する。木村松風以下の松和支部の合吟、それに宇都宮徳風門下の新人七名の真摯な懸命の吟、そして武井桃山86才、武藤薫風82才の高令乍らの元気な吟声を聞き感有り。

私が詩吟なるものを聞いたのは中学三年の時、剣道五段の教師が豪快な美声で「鞭声粛々」と吟じられたのが初めてで、今でも何となく頭のすみに沁みこんでいるような気がする。

松和支部には昭和五十年に正式に入り、三井先生の円満な基本的指導にあずかり、五十七年十月に奥伝をいただいたが、六十年体調をくずして以来、吟には余力を入れず、現在は楽しむ側にまわっている。どちらかというところ、漢詩が好きで入ったので、詩中の人物とか、そのバックランドに興味があった。

「和漢名詩の吟じ方」五巻の中には、中国詩138篇、和漢詩199篇、陶潜、王維、李白、杜甫、白居易、杜牧、蘇軾等皆素晴らしい漢詩人がいる。詩吟を学んだおかげで、彼等は路傍の人でなく、吾々の心に迫ってくる。

る。中国古典にも時には目を通す機会も多くなり、意外な発見もあり、五千年の民族の興亡もおぼろげながら、その哲学の中に知るようになった。

今回の合吟の、朱熹の「偶成」「勸学の文」蘇軾の「春夜」等、余りにも有名というか、手垢のつきすぎたと思われる程の名詩が、所謂、逸話の部に入り、正式の文集にはなく、作者自身の作かあやまれるというのも意外であった。これらの有名詩を読みながら、素朴な疑問がわいてくることがよくある。例えば蘇軾の「春夜」である。

春宵一刻值千金 花有清香月有陰

歌管樓台聲細細 鞦韆院落夜沈沈

解説はどの本を見てもロマンチックな、如何にも日本人好みの情の世界にある。これも所謂集外の詩、成作年代不詳・南宋に編集された「詩人玉屑」に引用され、蘇軾の若年時の作品と推察される。春夜全体の雰囲気、何か大宴会かなあといった感じ、そこに鞦韆が出てくる。突如としてブランコが出てくる。ブランコと日本式発声してみても急に此の詩との音感というか、そぐわないような気が起ってくる。鞦韆と此の詩の内容との関係は見聞が狭い故か、かつてその説明を見たことがない。(以下次号)

練吟メモ 漢詩余話

○筆者は、桜美林大石川忠久教授のNHK「漢詩をよむ」(ラジオ第2放送)を、第一回の昭和六十年四月から拜聴しているがテキストも六冊目となった。ご承知のとおり石川教授は、現在同大学の文学部長であり、全国漢文教育学会会長でもある。放送は毎週金曜、再放送は翌週木曜である。

○現在は、62年10月発行(年2回)のテキストを使用しているが、二月放送分に頼山の「母を送る路上の短歌」が載っているので、布団に入ってから目を通す。

東風迎母来 東風に母の来たるを迎え
北風送母還 北風に母の還るを送る

○右は教本(三・39)と違った訓み方である。教本は

東風迎母来 東風に母を迎えて来り
北風送母還 北風に母を送りて還る

と訓読している。訓みは違っても同義であるはず。すなわち、春三月、山陽の京都の家に広島から母が来た。そして十月に、母が還るのを送って行くところだといふのであれば、どうもテキストの方がすんなりした訓みである。と思えるし、筆者は前々から疑問に思っていたところでもあった。

○ここまではよかったが、テキストの(解説)に誤りのあるのに気がついた。

山陽は父春水の(三年忌のために広島へ帰り、一か月九州を遊歴し)春三月に母を伴って京都の自宅へ……以下略……

一文中()は筆者が付すとある。この詩は第十一句目に「五十の児七十の母有り」と詠んでいるとおり、山陽五十才の時の作であり、父の十三年忌の法要を広島で済ませたあとのことである。

○年譜によると、父の三年忌を済ませ、九州各地を遊歴した後、母と京都に旅立ったのは山陽四十才の時。その道中に作ったのが「われ芸に至りて留まること数旬。将に京寓に帰らんとし、遂に母を奉じてともに行く。侍興の歌を作る」の七言古詩(教本二・44)であることはご存知のとおり。してみると、前項で述べたテキストの解説中()内の三年忌と九州遊歴云々の記事は明らかに間違いで、(十三年忌を済ませた後)とするのが正しい。結局漢詩を取り違えて解説したもののようにある。

○石川教授はテキスト記載事項は大体放送されるので、日本放送出版協会に照会したところ、間違っていたので放送の際先生が訂正されるとの回答があった。これこそまさに漢詩余話というところであろうか。

鴛鴦歌 (狂歌)

夫婦相和す君羨やむなかれ
ただ憐む双鬢白霜の侵すを
偏に喜ぶ日常唯一の楽しみ

五十年來吟を忘れず
爺吟ずれば婆亦和す

春花秋月斯心を養う
汝百迄吾九十九まで

鴛鴦の契り老いて愈深し
相生之松風颯々

吾は詩を吟じ妻は舞を舞う

明けましておめでとうございます。今年も吟友の皆様共々健康で楽しい一年となりますよう。右の狂歌がびったしの私達になり、新しい年を迎えてめでたくもあり、めでたくも……でもがんばりましょう。

(入会)

818 鈴木たけ子 葉山町一色二五一一

(堀内・F) (電)〇四六八一七五一一二七一一

819 佐々木ミチニ 逗子市新宿三十八一二十六山本方

(真澄) (電)〇四六八一七三一一四八三二二

(退会)

785 267 土谷純風(真澄) 617 新倉勇(下山口)
林 聖子(真澄)